**事後報告**

タイトル：社会問題と帝国問題の連鎖－幸徳秋水の帝国主義論と「社会的なもの」

報告：セン亜訓（東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士後期課程）

司会：植村邦彦（関西大学経済学部教授）

**報告と質疑の概要**

　幸徳秋水の思想的位置にかんして、アナーキズムに傾いた社会主義と捉える見方が一般的である。そのなかで、非戦の立場から評価される一方、日本資本主義分析の不在と労働者階級の歴史的任務にたいする認識の欠陥がつねに指摘される。こうした位置づけをふまえ、本報告では社会問題と帝国問題の連鎖を切り口に、幸徳の帝国主義批判と社会主義を検討した。そのなかで、社会問題は単なる現象でなく、帝国主義への傾斜と近代化の道程にたいする懐疑から生まれた帝国問題と連鎖し、彼の社会主義につながっていた問題化の過程だと論じた。一般的に日本マルクス主義の前史に置かれた幸徳の論考における広義の歴史学派に属したシェフレ(Albert Schäffle)とイリー(Richard T. Ely)の論理の受容を取り上げ、報告では「社会化」と「非領土化」の観点を提示し、幸徳思想を帝国に回収されない社会的立場と位置づけた。

　質疑応答では、（1）報告のなかで用いられたcollective propertyとpublic property, social propertyといった概念の意味合いと、（2）非領土化という議論の根拠、（3）歴史学派経済学と明治日本の現実との距離にたいする幸徳の対応、（4）歴史学派経済学とアナーキズム思想の齟齬に関連する質問がなされた。これらの質問に対して、（1）報告者はシェフレとイリーの著作と現代の社会問題研究に準拠し、私有と相対し、集産社会をイメージした「共有」と政府的・公的所有権を含む「公的所有」、社会領域の出現にともなう「社会的所有」をわけて説明した。（2）社会的所有の概念を受容した幸徳の思想と行動を非領土化と捉える理由にかんして、報告者は非国民の観点を提起し、日露戦争期社会主義的公有と非戦、トランスナショナルな平民の連帯を求めていた平民社の活動を検討した。そして、帝国主義論から一貫し、非戦論にも内在した国家／非国民の対立構図から、帝国に回収されない社会化の立場を非領土化の試みとするという解釈を提示した。（3）と（4）にかんしては、思想伝来の歴史的背景と幸徳自身の体系的でない思想受容、大逆事件の圧殺などの原因で、社会主義運動に持ち込まれた諸学説のあいだの緊張関係ないし対立が必ずしも幸徳に意識されて問題視されたものではなかったと言える。それが幸徳思想の限界ではある一方、学説間の緊張関係はさらに明治社会政策論や大正アナーキズムの研究分野から再検討に値するものであると答えた。